

たので、農家へ働きに行くことはなかった。

昭和二十一年三月十八日、復員のため河南省洛陽を出発、南京經由で上海に着く。上海で第十二軍が復員するまで、日赤病院の前にいたが、日赤の人々は苦勞をしていた。四月二十七日、貨物船で上海出航、約一週間後和歌山県田辺港に着く。岸壁に日本の巡査がサーベルを腰に下げて立ち、米兵は肩に銃を掛けて立っていた。その前を通り田辺の兵站に入ったが、入り口に田辺の婦人会の方が少ない日の丸の小旗を振りながら迎えてくれた。今だに懐かしく忘れられない。有り難い兵站に一泊し、検閲を済ませ田辺駅を発つ時も田辺の人は見送ってくれ、心に残り有り難く思っている。田辺から家へ電報を打ったが、京都く姫路く姫新線で帰った自分の方が電報より早く着くことができた。駅を降りたがバスがない。友人がオート三輪で家まで送ってくれたが、家の方は皆変わりはなかった。国破れて山河あり、を実感したが、その後、青年団作り、公民館作りなどをし、故郷の復興に尽くすことができた。

テレパシー

愛知県 伊藤 義雄

—まず入隊までの様子を伺いましょう—

私は昭和五年三月、立田北部尋常高等小学校を卒業して農業に従事して、昭和十二年五月徴兵検査を受けました。当時は戦前で甲種合格者は少なく、三人に一人が甲種合格になるくらいでした。

私は甲種合格になり、検査官は、私に騎兵になってもらいたいと望んでいましたが、私の脚が少し短いので騎兵にはならず、歩兵にされました。当時、村の甲種合格者は全員、津島市の料亭で甲種合格を祝う会が毎年開かれる例になっていましたので、生後二十年を楽しく語ったものでした。

—昭和十二年には蘆溝橋事件が起きていますね—
—そうなんです。七月七日に戦争が始まったのです。

昭和十二年の十二月一日朝鮮平壤の歩兵第七十七連隊

に入隊するために村の氏神様に住民、消防団、婦人会、青年団、少年団、親戚の人たちが多数集まってくれて、二礼二拍手、一礼をして、元気で国家のために努めてきますと挨拶して、懐かしの神木をつくづく眺めて別れを告げ、津島駅までの約四キロの道を軍歌の声に送られて歩きました。このことは軍隊、野戦の苦しみがあつたとき、常々脳裏から離れることはなかつたです。名古屋までの電車で途中の青塚駅までくると、氏神様で頂いたお神酒の酔いも、二度と帰れないことを思うと覚めました。

—どこで乗船でしたか—

十二月二日、神戸の旅館に泊まり、六日神戸港で貨物船に乗船し親族の万歳で出港しました。五十三歳の父親は戦友の親たちと涙の見送りをしてくれました。

船は瀬戸内海から日本海に出ると全部船酔いして食事を取る者はいなかつたです。釜山から汽車で平壤に着き十二月十日、歩兵第七十七連隊に入隊しました。当日の天気は快晴で、気温は零下二〇度というすごい寒さでびっくりしました。当地では零下三七度の時も

ありました。

一期の検閲が昭和十三年四月に済み、四月二十九日は天長節で休みですから牡丹台という桜の名所に行き、満開の桜花を鑑賞して一句。

「牡丹台　これが最期の　桜かな」

翌三十日、平壤駅から貨物列車で日朝婦人会の見送りを受けて戦地に向けて出発しました。満州に入り、そして北支に入る駅では日朝婦人会の「日の丸」の旗を見ました。

保定駅で下車すると山西省から帰還する部隊と出会いました。その部隊の中に郷里の立田村出身の人が二人もいました。

—それは奇遇でしたね—

そうなんですよ。お土産をいろいろ頂きましたが、こっちは初年兵ですからね。嬉しかったです。

介休という町で現地の部隊と合流したその日に、最初の戦闘が始まったんですから驚きましたよ。なにしろ初めて弾丸の音を聞いたのですから……。なかなか前進することができなかつたです。そのう

ち慣れてくると弾の音がしても自分の所に来なければ前進できるようになりましたが、戦場に出ると負傷者や戦死者が多いことが知らされました。

山西省榆次、臨汾、運城、蒲州、風陵渡へと戦闘を時々やりながら進撃したのですが風陵渡の戦いは激しかったですね。

小銃中隊の中隊長が戦死されましたものね。他にも戦死者、負傷者が多く出ました。ここは西に黄河が流れ、対岸は潼関で、高い山から大砲で攻撃されたので被害が多かったです。

やっと風陵渡を占領して陣地をつくり六カ月間の陣地で警備につきました。

炊事は部落でしていました。私が炊事当番で部落にいた時でした。住民の子が病気になる困っていました。私は十五歳の時に、当時の言葉で「手のひら療法」を修業し修得していたのです。現在ではテレパシーとも言うのかしれませんね。当時の中国人は薬が少なくほとんど使ったことがないくらいの生活でしたから、この「手のひら療法」が良く効き病氣の子供が早く回

復しました。

これを聞いた部落の病人が次から次へと殺到し、俄か医者にさせられ、結局六、七十名の病人を治してやりました。私の先生は近くの佐屋町に住む黒宮先生で俳句も教えてもらいました。思わぬ所で修行が役に立ったわけです。

正月になりますと、この村の村長のお招きで小隊長緒方政善少尉と通訳と私の三人で村長宅で御馳走になりました。通訳もいるのでいろいろと話し合いました。話をしてみると中国の人も日本の人も全く変わらないことがよくわかりました。

戦場でのことでしたが村長宅の御馳走には日本酒や餅、寿司まで用意されていたのには驚きました。「手のひら療法」が縁となって部落民と仲良くなり、部落に変わったことがあると常に子どもが走ってきて教えてくれるようになりましたので警備の上からも助かったです。

ある日、豆腐売りの人が来ていると知らせて来たので出向いて調べて見たら履いている靴の中に部落の地

図があつて、日本兵の人数と馬の数や銃機の数まで記入されていたことがありました。敵の密偵が化けていたのでした。住民と仲良くなつてきますと、人間同士心の触れ合いが生まれ、戦争が終わつたらこの土地に住みたいなあと思うようになりました。

昭和十四年六月上旬、山西省平陸付近で作戦が始まり、風陵渡を出発して平陸に向かいました。

平陸は敵の根拠地で約二万人が付近の中条山脈に展開していました。歩兵七十七連隊は通称寺山高地の占領を命ぜられ約三時間の戦闘の末、この高地を占領。小銃一個小隊、重機二個分隊で警備することになり私も重機の四番射手として高地に残りました。

この高地には千数百年前に建てられた古寺があり、たまたま戦友と二人で水筒十個をぶら下げて水を貰いに古寺を尋ねた時でした。門が開いたままになっていたので声を掛けて中に入ったら、老僧が盛装して二人の小僧を両側にして合掌して出迎えてくれました。

思わず私も銃を置いて合掌をして水を頼むと、老僧は小僧に命じて十個の水筒に水を満たしてくれたので

合掌してお礼を言ったとき、老僧の額に光を感じたのです。テレパシーでお互いの心が通じたのだと思えます。その日の深夜陣地は敵襲を受け四千名の敵に包囲されました。

こちらはわずか七十名ですから勝負は明らかですよね、弾は少なくなり敵は高地の八合目まで迫ってきたとき、心は動揺し死を覚悟しました。午前五時、東方の中条山脈に明かりが指し始めたとき、陣地より一段高い高地から突撃ラツパが鳴り渡つたかと思う間もなく騎兵隊が救援に駆けつけてくれた時は天の助けと同時に、あの老僧が私を救ってくれたのに相違ないと、感謝の念に堪えないとは、このことなのだなと思ひ手を合わせました。

—その時の私の句

握り合う 日支の手々や 梅柳

山岳戦 これが最期と 散る桜

凍る夜や 日本と同じ 星を見る

秋の野に 戦友の六字の 声を聞く